〝尾藤野球〟チームに息づく

墓前に本選出場誓う

県勢が甲子園で輝かしい戦績を残すなど〝野球王国〟といわれる和歌山だが、社会人野球チームは現在、和歌山箕島球友会（有田市）のみ。県内で社会人野球を盛り上げるためにも、4月21日から始まる都市対抗野球大阪・和歌山1次予選に臨み、念願の東京ドームを目指す。チームの夢への歩みをたどった。【竹田迅岐】

和歌山箕島球友会 進め！ドームへ

都市対抗予選を前に

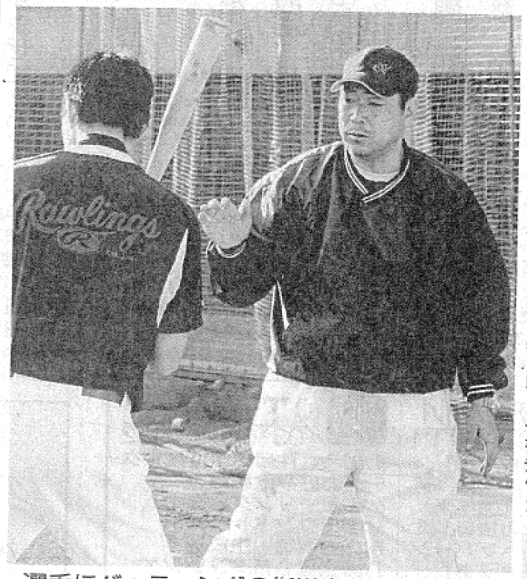
―上―

「途中でやめることになるなら最初からやるな」

甲子園で名をはせた箕島高野球部のOBが中心となり96年に創部した箕島球友会。チーム結成の相談を受けた元同高野球部監督の尾藤公さんは当初、難色を示した。「私たちがそれでもやるというので顧問となり応援してくれた。練習に何度も訪れノックもしてくれた」。同高OBの球友会の西川忠宏監督（51）は懐かしむ。

〝尾藤野球〟はチームに息づいている。同高が優勝した77年のセンバツでの選手起用は西川監督にとって印象深く、球友会での采配にも影響している。

準決勝の智弁学園（奈良）戦。貴重なタイムリーを放ったのは6番打者の先輩だった。調子があがらず初戦から凡打続きだったが、尾藤さんは起用を続けた。練習で人一倍努力しているのを見ていたからだった。



選手にバッティングの指導をする西川監督＝有田市で

西川監督 新戦力加え若返り

「チームワークとは何か」。球友会の監督となり、尾藤さんから尋ねられたことがある。「選手が自分の責任を果たすこと」。そう答えると諭すように言われた。「間違いじゃないが、その上に信頼がある」

球友会が初出場で初優勝した06年の全日本クラブ野球選手権。西川監督は努力家の選手を不調でも使い続けた。選手は決勝で期待に応え八回、逆転のタイムリーヒットを放った。

試合のあった栃木から尾藤さんに優勝を電話で伝えると「きょう帰ってこい。絶対起きて待っておくから」と言われた。夜行で戻り家を訪問。「よかったなあ」。うれし涙で迎えられた。

昨年3月、尾藤さんは亡くなり都市対抗本大会出場は報告できなかった。西川監督は墓前に予選突破を誓った。球友会は今春、新戦力を加え若返りを図った。元プロ野球選手のコーチも迎えオープン戦は好調だ。

今年8月には球友会などで組織する実行委員会が「尾藤公杯争奪野球大会」も開催する。県内外の社会人、大学計6チームが参加予定。西川監督は「尾藤さんも高校野球だけでなく、社会人などアマチュア野球の振興を願っていた。盛り上がるきっかけになれば」と期待している。